

舞い降りた神様

マミちゃんは勇気を出して、いつも通りすがりに見ているケーキ屋さんに入りました。

ショーケースに並べられているケーキは、どれも高そうでした。

初めて一人でするお買い物です。自分の持っているお金で買えるかどうかわからなかったのもので、心配だったので。

まだ小さいマミちゃんは、おこずかいというものがなくて、ポケットの中には今まで使わないうで大事に貯めていた百円玉が2枚と50円玉が2枚、それに10円玉が8枚入っているだけでした。

制服を着た若い女性の店員さんが、入ってきたマミちゃんを見て「いらっしやいませ」と声をかけました。

「あの～、“けえき”を一つ下さい」

緊張して固くなっているマミちゃんに、優しく「どんなのがよろしいですか？」と言

ながら、「一人なの？ママはどうしたの？」
と尋ねました。
「あのね、今日はママのお誕生日なの。いつ
もママの分しか買わなくて、自分は食べない
ママにプレゼントしたいの。真っ赤なイチゴ
が乗っているのがいいの」と、一所懸命に話
しました。
店員さんは、小さな女の子がお金を沢山持
っていないことは解っていましたので、一番
値段が安いものを取り出しました。
「480円でございます」
ママちゃんは、ポケットの中で握りしめて
いたお金を1枚ずつガラスケースの上に並べ
ました。でも、百円たりません。
「ごめんね。これではお売りできないの」と、
店員さんは自分が悪いわけでもないのに謝っ
て、とても気の毒そうな顔になりました。
お店の主ではないので、おまけするわけには
いかないし、自分もアルバイトしてお金を稼
いでいる身なので、立て替えてあげるわけに

もいきません。

中に居てやりとりを見ていたお客さんたち

も、きつとお母さんは一人で働いてマミちゃん

んを育てているのだと想像できましたが、マ

ミちゃんの気持ちを考えると、お金を出して

あげることはとても失礼なことになると思っ

て困っていました。

マミちゃんは小さいけれど、自分の持って

いたお金ではそのケーキが買えないことはよ

くわかっていました。

「すみませんでした」と言っけて引き返そうと

したのですが、悲しくて涙が溢れました。

それで、入り口のマットにつまずいて転んで

しまい、お金はそこらじゅうに散らばってし

まいました。

中にいたお客さんたちが全員駆け寄ってき

て、一人のおばちゃんは転んだマミちゃんを

抱き起して、擦りむいた膝小僧を、ハンドバ

ッグから取り出した真っ白なハンカチで手当

てしましたし、他の人たちは散らばったお金

を拾い集めるのを手伝いました。

外にまで転がってしまったお金を探し出したのは、若いお兄さんでした。

「さあ、これで全部かな？数えてみてご覧」といいました。

それから、お兄ちゃんはお花屋さんなんだよ、これはお母さんに上げてね」と言って、持っていた赤いバラの花束を渡しました。

マミちゃんがお金を数えてみると、百円玉が1枚多かったのです。

「百円多いのだけれど」とマミちゃんが正直に言うのと、みんなが口を揃えていいました。

「きっと、最初からポケットの底に隠れていたんだよ」と

そして、「これでケーキが買えるね。きっとママが喜んでくれるね」とにこにこ顔で言いました。

マミちゃんは、みんなに「ありがとう」と、ていねいに頭を下げてお礼をいいました。

店	の	外	に	出	る	と	、	太	郎	お	じ	さ	ん	が	通	り	か	か	
っ	て	声	を	か	け	ま	し	た	。	「	お	っ	、	マ	ミ	ち	ゃ	ん	一
人	で	お	買	い	物	か	」												
太	郎	お	じ	さ	ん	は	マ	マ	の	弟	で	、	い	つ	も	マ	ミ	ち	
ゃ	ん	を	可	愛	が	っ	て	く	れ	ま	す	。							
「	お	じ	ち	ゃ	ん	ね	、	い	ま	天	使	様	が	舞	い	降	り	て	助
け	て	く	れ	た	の	」	と	、	ケ	ー	キ	屋	さ	ん	で	の	話	を	し
ま	し	た	。	マ	ミ	ち	ゃ	ん	は	そ	れ	が	ど	ん	な	こ	と	か	わ
か	っ	て	い	た	の	で	す	。											
お	じ	さ	ん	は	そ	れ	を	聞	く	と	「	ケ	ー	キ	は	マ	ミ	の	
分	が	な	い	の	だ	ろ	う	？	お	じ	さ	ん	の	分	も	一	緒	に	買
お	う	」	と	言	っ	て	ケ	ー	キ	屋	さ	ん	ま	で	引	き	返	し	、
中	に	残	っ	て	い	た	お	客	さ	ん	た	ち	に	も	丁	寧	に	お	礼
を	言	い	ま	し	た	。													